

原 著

女性外来に通院中の更年期女性の皮膚症状に関する調査

¹東京女子医科大学附属女性生涯健康センター²東京女子医科大学医学部皮膚科学オオイ コ シンモト サツキ アリカワ ジュンコ
大井のり子¹・新元 五月²・有川 順子¹
ウエダカヨコ カモトシコ ヒガキ ユウコ
上田嘉代子¹・加茂登志子¹・檜垣 祐子¹

(受理 平成21年1月22日)

Dermatological Changes in Menopausal Women in Ambulatory Consultation at the Women's Clinic

Noriko OHI¹, Satsuki SHINMOTO², Junko ARIKAWA¹,Kayoko UEDA¹, Toshiko KAMO¹ and Yuko HIGAKI¹¹Institute of Women's Health, Tokyo Women's Medical University²Department of Dermatology, Tokyo Women's Medical University

This study interprets a questionnaire about changes in skin condition and symptoms filled out by 121 women aged 35 to 59, who consulted one or several of the departments in the Institute of Women's Health. Concerning skin symptoms, 45.5% of the respondents experienced facial itching, and 36.4% itching on the neck, 40.5% felt hot flashes, 36.4% hotness or dysesthesia on the hands and feet, 45.5% experienced sweating on face and scalp, and 19.0% on hands and feet. As to other skin changes, 47.1% experienced dry skin, 46.3% ptosis, 44.6% hair loss and 56.1% skin cracking on the heels. The majority of the respondents were suffering from different health and familial problems, too. These stressors seemed to act as major exacerbating factors for many of the skin troubles of *peri-menopausal* women visiting our clinic.

Key words: menopause, questionnaire study, skin, stressors

はじめに

更年期とは性成熟期から老年期、つまり卵巣機能が衰退・消失するまでの時期を指し¹⁾、一般的には閉経前後の10年間、すなわち45~55歳と捉えられている。この時期に現れる多種多様な心身の症状を更年期障害(更年期症候群)という²⁾。実際には卵巣機能低下は35歳頃から始まると考えられ、早ければ30歳代後半から更年期障害の症状を生じることもある。

更年期障害の症状のうち良く知られているのほせ、発汗、顔のほてりは皮膚に関する症状とも捉えられるが、このような更年期障害の中核的な症状以外にも、日常診療で経験される様々な皮膚症状が更年期の身体的・心理社会的変化を基盤として生じているのではないかと推察される。

そこで今回、皮膚科、婦人科、内科、メンタルケ

ア科等で構成される女性生涯健康センターに通院中の患者を対象として更年期の皮膚症状についてアンケートにより調査したので報告する。

対象と方法

対象は当センターの診療科(皮膚科、婦人科、メンタルケア科、内科など)のいずれかの診療科を受診した35~59歳の女性とした。前述したように、一般には更年期は45~55歳と捉えられているが、その身体的変化の中心となる卵巣機能低下は35歳頃から生じるため、今回は更年期の年齢を35~59歳と広めに設定し検討を行った。

アンケートの実施方法は、センター受診時に調査の主旨を説明し、アンケート用紙を渡し、記入後に回収した。なお、アンケートへの回答をもって同意を得たものとした。調査は2006年10~11月の1ヵ月間実施した。

アンケートの内容：日常診療での患者の訴えなどから比較的経験されると思われる皮膚症状や皮膚に関する問題に関し、以下のような事項について18の質問を設定した。

自覚症状に関して、顔・手足のほてり、顔・頸・頭皮・外陰部の痒み、頭皮・顔・手足の発汗について尋ねた。

そのほかの皮膚の問題として、顔の赤み(赤ら顔)、にきび、眼瞼のたるみ(眼瞼下垂)とそれによるアイラインの引きにくさ、薄毛、ネックレスが引っかかる(頸部のしわ・たるみ・アクロコルドンによるもの)、皮膚の乾燥、踵の角化・亀裂について質問した。さらに化粧品によるトラブルの有無と外見への関心の高さについて、鏡を見る回数が増えたかどうかを質問した。

回答は「当てはまる」、「どちらともいえない」、「当てはまらない」の選択肢から選ぶこととした。

同時に月経の状態(順、不順、閉経)、更年期障害と言われたことがあるか否か、また抱えているストレスの有無についても質問した。

結 果

1. 回答者の背景

121名の女性から回答を得た。年齢は35～59歳、平均47.0歳であった。年齢分布を図1に示した。受診した科はメンタルケア科48名(39.6%)、皮膚科40名(33.1%)、婦人科8名(6.6%)、内科4名(3.3%)、その他3名(2.5%)、複数科併診18名(14.9%)であった。

更年期障害と言われたことがあるか否かは、「はい」35名(39～59歳)(28.9%)、「いいえ」75名(35～58歳)(62.0%)、無回答11名(9.1%)であった。月経については、月経順調53名(35～51歳)、不順21名(35～52歳)、閉経41名(45～59歳)であった。

2. 皮膚症状について

図2に各質問項目に対する回答を示した。自覚症状に関する質問では、全回答者中、「当てはまる」と回答した女性は、顔の痒み(Q3)45.5%(更年期障害と診断されていない回答者では48.0%)と、顔・頭皮の発汗(Q5)45.5%(同38.7%)とが最も多く、次いで、顔のほてり(hot flash)(Q1)40.5%(同33.3%)、首の痒み(Q4)36.4%(同26.8%)、手足のほてり・しびれ(Q15)36.4%(同36.0%)が目立った。

これらの自覚症状は更年期障害と診断されていない回答者でも、少なからず自覚されていた。

月経の状態別に見ると、顔のほてり、顔・頭皮の

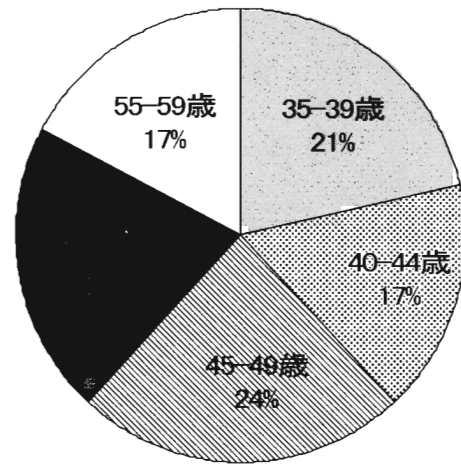


図1 回答者121名の年齢分布
アンケートの回答者の年齢分布を5歳区切りで示した。

発汗、手足のほてり・しびれ、顔や首の痒みは、閉経前の月経不順の時期に多い傾向があった(図3)。

外見の変化や皮膚の機能に関する質問で「当てはまる」が多かったのは、眼瞼下垂(Q9)46.3%、薄毛(毛髪量の減少)(Q11)44.6%、皮膚の乾燥(Q14)47.1%、踵の角化・亀裂(Q17)56.1%などであった。一方、「当てはまる」が比較的少なかったものは、にきび(Q6)21.5%、顔の赤み(Q2)12.4%、ネックレスが引っかかる(Q12)、化粧品によるトラブル(Q7)が各々7.4%などであった。また、外見への関心については24.7%が鏡を見る回数が増えた(Q13)と回答した。

年齢との関係を見ると、各質問とも当てはまると回答した例は、35～36歳から54～59歳に分布し、平均45.9～49.2歳であったが、ニキビ(Q6)については36～55歳にわたるものの、平均では42.8歳と比較的若年であった。

3. ストレス因子

全回答者の83.1%が何らかのストレス因子を自覚しており、ストレス因子としては健康問題など「自分自身のこと」が84.8%、「家族のこと」が67.6%と多く、次いで「仕事上の問題」が29.5%、「パートナーとの関係」が31.4%であった。

考 察

更年期の女性の皮膚症状については、これまで、更年期障害の症状として婦人科領域でのいくつかの調査があるにすぎず、皮膚科学の視点から検討されたものはほとんどない。廣井らは、40～65歳の一般女性を対象としてアンケート調査を行った結果、皮膚症状を訴えた症例は、のぼせ13.3%、発汗11.4%、

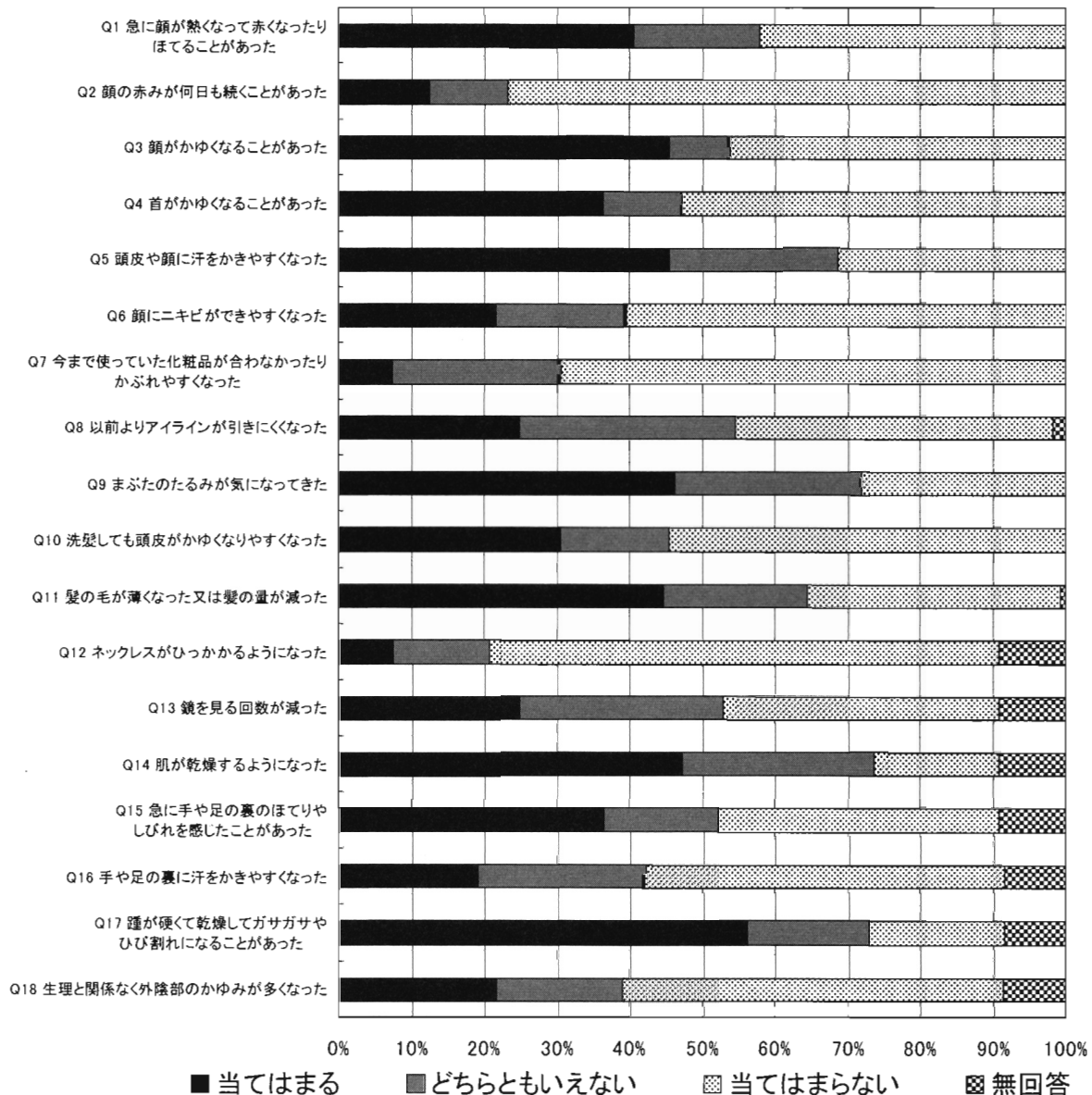


図2 更年期世代女性の皮膚症状
アンケートの18項目の質問に関する回答結果を示した。

皮膚の痒み9.0%、腔乾燥感4.4%であったと報告している³⁾。一方、牧田らは更年期外来に受診した女性の皮膚症状についてアンケート調査を行い、受診者の28.5%が皮膚症状を有し、受診時の症状としては、ほてり、発汗、冷えが60%前後にみられたのに加え、乾燥、しみ、しわ、毛髪量の減少を50%程度が自覚していたと報告している⁴⁾。また、以前に比べて気になる症状としては、しみ、かさつきに加え、痒みと回答する例が多かったと述べている。

著者らは女性外来の日常診療で受診者が訴える皮膚の問題について18項目を取り上げ、その自覚の有無を調査した。今回の調査結果から、更年期の女性にはこれまで更年期障害の症状として知られている

ほてり、発汗の他に、顔や首の痒み、手足のしびれを自覚している者が多いことがわかった。また、更年期障害と言われたことのない(診断されていない)女性にもこれらの症状は高頻度に自覚されており、程度の差はあると思われるが、更年期世代の女性に特有の共通した状態、あるいは病態である可能性が考えられる。すなわち、これらの症状は、更年期における卵巣機能低下に伴う自律神経機能の失調を基盤として生じているのではないかと推察した。このことは、月経の状態から見た場合、月経不順の時期にこれらの症状を自覚している例が多いという結果とも合致するのではないかと考える。

薄毛や眼瞼下垂は、加齢変化に関する質問でもあ

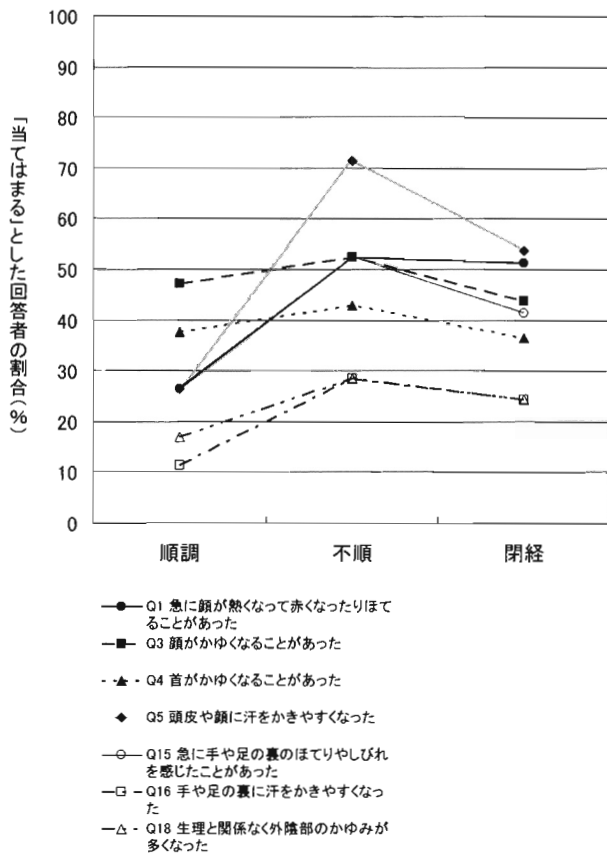


図3 皮膚症状と月経との関係

図に示した皮膚症状は月経不順時期の女性に多い傾向が見られた。

るが、全体の半数近くが自覚していた。これらについて、今後若年者、高齢者と比較検討することで、更年期世代の特徴がより明瞭になるものと思われる。また、ニキビを自覚していた回答者の平均年齢は、ほかの質問に比べて42.8歳と比較的若年で、月経も順調なものに多かったことから、更年期の皮膚の問題としては、あえて取り上げなくてもよいのかもしれない。

さらに、今回の調査では多くの例で自分自身のこと、特に健康問題や家族の問題などのストレスを抱えていることが明らかになり、これらが、皮膚症状を含めた身体症状の悪化因子として作用している可能性が示唆された。後山らは更年期の不定愁訴を有する女性を対象に、ストレス因子について調査した結果、71%がストレス因子を自覚し、その内容としては自分自身のこと55%と最も多く、そのうち健康に関することが37%を占めたと報告している⁵⁾。

さらに、子供に関すること25%、介護など両親に関する問題が20%、配偶者との関係12%であったとしており、今回の調査結果はこれとほぼ同様の傾向を示している。

このことから、何らかの症状の訴えをもって外来を受診する更年期世代の女性の場合、自身の健康や家族の問題がストレス因子として重視すべき問題であると考えられる。従って、更年期女性の診療に当たっては、皮膚症状の訴えを様々な身体症状の1つとして受け止め、その背景にある前述の心理社会的要因にも配慮し、まずは「ねぎらいの心」をもって診療に当たることが望ましいと考える。また、鏡を見る回数が減るなど、外見への関心が低下していると推察される例は、容貌の衰えを意識して、社会生活が消極的になっていることもあるため、より前向きになれるよう、化粧の指導などを含め、支持的に対応するとよいと思われる⁶⁾。

今回の検討は、女性外来通院中の患者を対象としたため、更年期障害と診断されていない女性であっても、様々な身体症状を自覚している例が少なかったと考えられる。今後は、一般の更年期世代の女性を対象に検討する必要があるとともに、今回用いた質問票をもとに更年期女性の皮膚に関する問題について、より正確に評価をよりするための質問票を作成していきたい。

本論文の要旨は第107回日本皮膚科学会総会において報告した。

文 献

- 1) 太田博明：更年期とは—ホルモン環境の変化と身体的変化。「更年期外来診療マネージメント」pp8-14, 南江堂, 東京 (2002)
- 2) 後山尚久：更年期女性の身体特性。「更年期の臨床」pp7-27, 診断と治療社, 東京 (2006)
- 3) 廣井正彦, 麻生武志, 相良祐輔ほか：生殖内分泌委員会報告 (更年期障害に関する一般女性へのアンケート調査報告)。日産婦誌 49: 433-439, 1997
- 4) 牧田和也, 太田博明, 川島 興ほか：更年期女性における皮膚の変化に関する検討。日更年期医誌 5: 166-172, 1997
- 5) 後山尚久, 池田 篤, 東尾聡子ほか：更年期・初老期の不定愁訴例における社会・文化的ストレス要因の解析。女性心身医 7: 64-69, 2002
- 6) 檜垣祐子, かづきれいこ, 加茂登志子ほか：顔面の皮膚病変に対するリハビリメイクの患者QOLへの影響。臨皮 60: 879-883, 2006